

松 山 大 学 論 集
第 20 卷 第 3 号 抜 刷
2 0 0 8 年 8 月 発 行

英米文学鳥類考：カワセミについて

榊 田 隆 宏

英米文学鳥類考：カワセミについて*

榊 田 隆 宏

1

カワセミを漢字で書けば、「川蟬」か「翡翠」である。でも、セミでもなければ、宝石でもない。カワセミは英名で **kingfisher** という、れっきとした鳥である。でも「一体どんな鳥か」と聞かれると、一般の人は返答に窮する。それが証拠に、《カワセミ学》の初歩とも言える次の質問をしてみるとよい。「①スズメ、②ムクドリからハト、③カラス。この4種の鳥は、野鳥の大きさを識別する際の3大基準¹⁾であるが、果たしてカワセミはどれに当たるか」。この問いに対して、自信を持って「スズメ大の(美しい)鳥」と即答できる人はそう多くは居まい。多分、明答者は野鳥に関心がある人か、常日頃カワセミの姿を見慣れている人であろう。というのもカワセミは、スズメのように有りふれた鳥ではなく、「水辺の林を^{すみか}住処」とする「警戒心の強い」²⁾「孤独な鳥」で、しかも「水域の汚染と都市化が進んだため、その数は最近急激に少なくなっている」からである。

カワセミは「ブッポウソウ目カワセミ科カワセミ属」に属する。最初に、大枠のカワセミ科から見てみる。『朝日＝ラルース世界動物百科(鳥類)』によれば、「カワセミ科には、14属約90種が含まれ、南極大陸を除くすべての大陸に分布しているが、とりわけアフリカ、東南アジア、オセアニアに多い。寒い地方には少なく、北アメリカとヨーロッパには、おのおの1種づつしかない³⁾という。この「おのおの1種づつ」について具体的に言えば、ヨーロッパでは **Common Kingfisher**⁴⁾、北アメリカでは **Belted Kingfisher**⁵⁾ のことである。

前者は我が国のカワセミと同種の鳥である⁶⁾。一方、後者は属を異にし（ヤマセミ属）、体長も倍近く大きい（約30センチ）⁷⁾アメリカヤマセミのことであり、本邦には生息していない。したがって、本論ではこれを除外し、日・英で共通するカワセミ（〔正式英名〕Common Kingfisher）のみを取り上げる。

この「ブッポウソウ目カワセミ科カワセミ属」のカワセミについて、『朝日＝ラルース世界動物百科（鳥類）』は「ユーラシア大陸の温帯と熱帯地方、アフリカの大部分、インドネシアとオセアニアの島々に分布し、ヨーロッパでは、極地に近い地方を除いて全土にすんでいる。日本でも、北海道から沖縄まで分布している」⁸⁾と言う。ちなみに、鳴き声が「仏・法・僧」と聞こえる鳥は、正真正銘の「ブッポウソウ」ではなく、小型のフクロウの「コノハズク」である⁹⁾。このため、前者を「姿のブッポウソウ」、後者を「声のブッポウソウ」¹⁰⁾と言う。姿のブッポウソウの鳴き声は、「ゲッゲッゲエーッ」¹¹⁾と味気ないものである。また我が国でカワセミ科の鳥と言えば、カワセミ（Common Kingfisher）、ヤマセミ（Greater Pied Kingfisher）、アカショウビン（Ruddy Kingfisher）¹²⁾の3種¹³⁾がある。

以上の点を踏まえた上で、①カワセミ（以下、英語ではkingfisherと略す）とは一体どのような鳥なのか；②和名のカワセミと英名のkingfisherの語源とは何か；③カワセミは神話、民間伝承、文芸の世界で如何なる役を演じているか、等々について考えてみたい。では、問いの①から始めよう。和書と英書からカワセミについての概略を見てみる。

① 平凡社『世界大百科事典』

ブッポウソウ目カワセミ科の鳥の1種、広義には同科の鳥の総称。カワセミ *Alcedo atthis*（英名 common kingfisher）は全長約16cm。美しい水辺の鳥で、古くからよく親しまれている。背面は暗緑青色、下背以下はとくに鮮やかな緑青色で、眼先、耳羽、腹は栗色である。カワセミ科の鳥の中ではもっとも分布域が広く、亜寒帯以南のユーラシア大陸、アフリカの大

部分、東はソロモン諸島まで分布している。日本でも全国の河川、湖沼、池などに留鳥、または漂鳥としてすんでいるが、水域の汚染と都市化が進んだため、その数は最近急激に少なくなっている。食物は小魚を主とし、水生昆虫などもかなり食べている。捕食するときは、止まり場からぱっと急降下して餌をとり、すぐ元の止まり場に戻って食べる。巣は土手に1m前後の横穴を掘り、4～6月に1腹5～7個の卵を産む¹⁴⁾

② *The Complete Books of Birds*

These birds are surprisingly hard to spot, as they perch motionless scanning the water beneath them for fish. When it has spotted its prey, the kingfisher appears as a flash of color as it dives. A protective membrane covers its eyes as it enters the water. Its wings provide propulsion, and having seized the fish in its bill, the bird then darts out of the water and back on to its perch with its catch. This movement happens incredibly fast, with the whole process taking little more than a mere second. The kingfisher first stuns the fish by hitting it on the perch and then swallows it head first. It regurgitates the bones and indigestible parts of its meal later.¹⁵⁾

(カワセミは、魚を求めて眼下の水面を見つめながら、身動き一つしないで止まっている。そのため、驚くほど見つけ難い鳥である。獲物を見つけて水中に飛び込む時には、まるで色の付いた光に見える。水中に突入すると、保護膜が目を覆う。翼による推進力を行使して、嘴で魚を捕らえると直ぐ水中から飛び出し、獲物を銜^{くわ}えたまま止まり場に戻る。この動作は信じられないほど速く、時間にすれば1秒そこそこである。止まり場で魚を打ちつけ、失神させてから頭から飲みこむ。骨や消化の出来なかったものは後で吐き出す。)

この二つの説明だけでは、《カワセミとはどんな鳥か》未だイメージし難い人も多いに違いない。というのも、我が国の現状を思い見れば、カワセミの観

察はおろか、その姿すら見たこともない、という人が大半を占めるであろうから。というより、今の日本でカワセミに関心を寄せる人など一体どれほど居るのだろうか。それを思うと誠に心許ない限りである。加えて、カワセミ自体が見つけるのに大変苦勞する鳥なのである。事実、専門書にも「用心深くて、あまり人の前に姿を見せない」¹⁶⁾とか「驚くほど見つけ難い鳥」という記述がある。でも有り難いことに、『朝日＝ラルース世界動物百科（鳥類）』にカワセミについての明快で詳細な解説がある。これに便乗して、長くはなるが、じっくりとカワセミについて紙上観察をしてみよう。

2

カワセミは、全長16～17センチほど、ずんぐりとしたからだつきで、頭とくちばしが大きく、尾は短い。背面は、頭から尾の先まで、暗緑青色とコバルト青色をしており、背中は強い金属光沢をおび、光のぐあいでもいろいろな美しい色に見える。腹面は濃いくり色で、目頭とほおもくり色、のどの部分とくびの横が白い。くちばしは黒っぽく、全長の4分の1近くを占めるほど長くて、先がとがっており、まっすぐである。あしは暗赤色で短く、ふつうは、からだの下に隠れてよく見えない。雌雄の羽色は、ほとんど同じである……

ふつう、水辺の林をすみかとしていて、日中はたいてい水面の上に突きでた枝や杭の上に静止し、水面の近くに小魚が現れるのを見張っている。カワセミは孤独な鳥で、自分の漁場を占有し、そこを離れることはほとんどない……(止まり場から)水面を見張るが、何時間も同じ枝にとまって、じっと水面をみつめ、しんぼう強く獲物を待つ……

カワセミは、獲物を見つけると、くびをのぼし、からだを前に傾け、くちばしを下に向けて、まっすぐに水中に身をおどらせる。そして、水のなかに消えるや獲物をくわえてすぐにまた浮かびあがり、とまっていた場所にもどる。それから、獲物の小魚を自分のとまっている枝や杭に2、3度

打ちつけて殺し、魚がのどにひっかからないように、必ず頭のほうから飲みこむ。このとき、獲物を空中に放りあげ、口にくわえなおしたりもする。

カワセミの飛び方はいつも非常に速くて直線的だ。水面をかすめるように、川の流れて沿って飛ぶが、それはまるで色のついた矢が走るように見える……カワセミは、ハチドリがよくやるような停止飛行もする。水面から数メートルの空中に、まるで糸でつり下げられたようにとまっている。そして、つばさを、よく見えなくらいに速く羽ばたかせ、ねらいをつけた魚をつかまえるチャンスを待つ。この間、せいぜい2、3分である。

カワセミがこのような漁法で魚をとるのは、あしにみずかきがないので、水中で獲物を追いかけるわけにいかないからだ。だから、魚が水面に出てきたときにつかまえる術にたけてしまったわけだが、これはこれで、うまい漁法だといえる。もちろん、この漁法は水が澄んでいることが前提条件となるので、よごれた川にはカワセミの姿は見受けられない……

巣は、ふつう、水辺近くの垂直な崖、とりわけイタチやネズミなどの天敵が容易に近づけないような砂地の崖に横穴を掘ってつくる。切りたった壁面に雌雄がくちばしで掘った穴は……直径5～7センチ、深さは50～100センチほどで、穴のいちばん奥は広くなり、直径15センチぐらいの産室となっている……

産卵は4月末から5月上旬にかけて行われ、雌は丸くて白い、光沢のある卵を6、7個、産室の地面の上にじかに産む……かえったばかりのひなは赤はだかで、数日間は目も閉じたままである……

ひなが大きくなると、親鳥はもうひなのいる産室に入れなくなり、巢のなかでからだの向きをかえることもできなくなる。そこで、運んできた魚をひなの大きく開けた口のなかに放りこむと、そのまま横穴を後ずさりして外に出る。そして、水に飛びこむ。これはからだを洗うためである。というのは、ひなは排泄物や、吐きだした魚の骨のかたまりを横穴に投げとばすので、横穴はまるでごみためになっているのである。幼鳥のか

らだにはえてくる最初の羽毛は、青みがかった黒い針のように見える。これは羽毛を包んだ鞘^{さや}で、この鞘はやがて開いて羽毛となる……

カワセミは1年に3回も営巣することがある。これほど繁殖力の盛んな鳥が、ほんのわずかしか生き残らないのは意外である。その原因としては、人里離れた静かな場所を好む習性とか、独特の営巣方法などが、変化の激しい環境に合わなくなっていること、テリトリーがはっきりしているため、1か所に多くの個体が生息できないことなどによるらしく、日本でもカワセミは非常に減少してきた¹⁷⁾

3

では次に、英国版の『野と森の鳥』でカワセミを見てみよう。

The Kingfisher

The kingfisher is the most brilliantly and gorgeously coloured of all British birds. Its Greek name is 'Halcyon', and a bird of this name, according to legend, used to breed in nests on the crest of the waves, charming the winds and calming the sea. Thus the bird was popularly associated with calm, peace and happy portent.

It is a small bird, about seven and a half inches long, with a disproportionately large head, short tail, and a long black dagger-like bill. Its back, wings and tail are cobalt-blue, but may in certain lights appear emerald-green. The under parts are russet-brown, throat and neck patched white, feet red. There is little variation between the bird's summer and winter plumage.

The kingfisher is a surprisingly agile flier, and is nearly always seen near to water, especially slow-flowing rivers and streams, ponds and brooks. It perches on a branch overhanging the water, or even hovers directly over it, plunging down in a spectacular dive at the merest hint of movement. Its favourite types of fish are minnows and stickle-backs, and it also hunts for aquatic insects. Returning to its perch, it swallows the fish head first, tossing it into the air if necessary to get it into the correct position. In the winter it

may stray to the sea-shore in search of small crustaceans.

The kingfisher's nest is generally found in mud banks or occasionally in sandpits. A long horizontal tunnel is bored into the bank by both birds. This extends for two or three feet and ends in a rounded chamber, in which the eggs are deposited, six or seven in number, spherical and glossy white. They are usually hemmed in by a pile of undigested fishbones, which renders the atmosphere somewhat unpleasant. The young birds are born naked, but soon develop a bristle-like sheath, which then peels off to reveal the gaudy plumage of the adult. The fledglings are fed by both parents, instinctively forming a circular queue at the base of the tunnel, and applying one by one for their meal¹⁸⁾

(英国の鳥類の中で《最も光り輝く華麗な色彩を有する鳥》、それがカワセミである。ギリシア語では「Halcyon (ハルシオン)」と言う。言い伝えによると、この鳥は風を鎮め、海を穏やかにして、波頭に漂う浮き巣で雛を育てた、という。かくしてカワセミは、一般に、平穏・平和・幸福の前兆に関連付けられた。

体長7.5インチほどの小さな鳥で、体に似合わぬ大きな頭や短い尾、それに短剣のような長くて黒い嘴を持つ。背面と翼と尾の色はコバルト・ブルー。でも光の具合によっては、エメラルド・グリーンにも見える。腹部は栗色で、喉と首には白い斑がある。足は赤色。夏羽と冬羽では殆ど違いはない。

飛翔は驚くほど速く、ふだん目にする場所は水辺。とりわけ流れの緩やかな川や小川、それに池や細流の近くである。水面の上に突き出た枝に止まっているか、水面の真上で停空飛翔(ホバリング)しながら、眼下で僅かな動きでもあろうものなら、目を見張るようなダイビングをして水中に身をおどらせる。好物はヒメハヤとトゲウオだが、水生昆虫もあさる。魚を仕留めた後、止まり場に戻ると、頭の方から飲みこむ。そのために必要とあらば、獲物を空中に放り上げたりもする。冬にはカニやエビなど、小型の甲殻類動物を求めて海岸に迷い込むこともある。

一般に巣が見つかるのは土手であるが、砂の採取場で見つかることもある。雌雄は土砂をくり抜いて、長い横穴の巣を作る。その長さは2、3フィート。奥には丸い産室があり、そこで産卵が行われる。卵の数は6～7個。形は球形、色は光沢のある白。通常、卵は、消化できなかった、山のような魚の骨に取り囲まれている。そのため、巢穴の環境は少々気持ちが悪い。雛は赤裸で生まれるが、すぐに剛毛のような羽鞘うしゅうが生える。やがて、この羽鞘はが剥がれて、成鳥のきらびやかな羽毛が現れる。雛鳥の養育は雌雄共同。雛たちは、本能的に横穴の奥で丸い行列を作り、順番に餌をねだる。）

要約すれば、カワセミ (kingfisher) とは、①スズメ大の小さな鳥。ずんぐりとした体つきで、スタイル良しとは言えない。だが、背面が光り輝くコバルト・ブルー、腹面が濃い栗色に染め分けられ、その対比が誠に美しい鳥。「水辺の宝石」¹⁹⁾とか「空飛ぶ宝石」²⁰⁾と呼ばれる。柳田国男は、「そのおかしな嘴と尻尾」は別として「その羽毛の彩色に至っては、確かに等価を絶している」²¹⁾と述べている；②ギリシアでは「ハルシオン」と呼ばれ、この鳥にまつわる有名な変身譚がギリシア神話にある；③飛び方は矢のように速くて直線的、流れに沿って水面を掠めるように飛ぶ；④独特の漁法、水中にダイビングして魚を捕らえる、となろうか。こうしたカワセミ独特の姿を、我が国の俳人たちは世界最短の詩形の中で見事に活写している。

- | | |
|--------------------------------------|-----------------------|
| ① 「翡翠は川の宝石光り飛ぶ」 | (竹葉英一) ²²⁾ |
| ② 「翡翠は空を銜 <small>くわ</small> えて飛び立てり」 | (桑原三郎) ²³⁾ |
| ③ 「かはせみや絵の具を流すおのが影」 | (馬光) ²⁴⁾ |
| ④ 「翡翠の掠めし水のみだれのみ」 | (中村汀女) ²⁵⁾ |
| ⑤ 「川せみのねらひ誤る濁かな」 | (正岡子規) ²⁶⁾ |

4

では、問いの②：和名のカワセミと英名の kingfisher の語源について。最初に、漢字の「川蟬」と「翡翠」から。カワセミが昆虫の蟬ではない以上、川蟬は当て字であり、翡翠が正式名である。それは、漢名：《翡 [雄のカワセミ] + 翠 [雌のカワセミ]》²⁷⁾ に由来する。「このように雌雄で一種の鳥の名をあらわしたものに鴛鴦^{おしどり}があり、また仮想の鳥として知られているものに鳳凰^{ほうおう}がある。みな色の美しい鳥であるのみならず、雌雄ともに仲のよい鳥に限られて使われている……(字の順序は) 雄性が先で、雌性が後である」²⁸⁾ と内田亨氏は言う。事実、アト・ド・フリースの『イメージ・シンボル事典』にも、「カワセミはおしどり夫婦²⁹⁾ (“connubial faith”)³⁰⁾」とある。翡翠^{かわせみ}の特色は何よりも、その美しく艶やかな羽の色にあるが、「宝石の翡翠はその色に似ている石というので、(それに因んで後から)つけられた名称³¹⁾」である。この華美な色彩に関して、学者は「穴の中では外敵に姿が見つかることがないので、目立つ色をしていてもかまわないのである」³²⁾と言う。ともあれ、カワセミの語源を「川瀬見」³³⁾とする説がある。素直な解釈として首肯できるが、これ以外の説を見たい。吉田金彦編『語源辞典：動物編』に以下のような詳しい説明がある。

歴史仮名はカワセミ。カワ(川)にソビの変であるセミの付いたもの。系統を同じくすると思われる、カワセミの方言に共通する音を抜き出して整理すると、S □+□ i(a) という基本形が抽出される。これは古名ソニと一致する。すなわち、ソおよびその音転と、ニおよびその音転、この二つの音転の組み合わせの結果が、方言のさまざまな形となる。また『新撰字鏡』の「鴝 曾爾」、『和名抄』の「鴝 曾比」、『類聚名義抄』の「小 微^{しょうび}」、『日葡辞典』の「カワセビ」、『下学集』の「カワセミ」という奈良時代以降の音韻変化とも一致する。「セミ」は「ソニ」という古名に由来する。

次に「ソニ」の語源については、①「ソニドリ」(翠鳥)の音転説、②

「ソ^に丹」説の二説が有力である。『古事記』『日本書紀』には「翠鳥」には「ソニドリ」の訓がある。翠は必ずしもグリーン系統の色のみを意味していたものではなく、ブルー系統の色も指していた。翠天とは青空のことであり、翠鳥とは青い鳥の意である。すなわち、ソミドリがソニドリになったという説である。ただ、語構成をソニードリではなくソーニドリとしている点に疑問が残る。ソニの用例は見られるが、ニドリの用例は見当たらないからである。「ソ丹」の説の「丹」は「赤土」ないし「赤土からとった絵の具」のこと。したがって、赤い鳥の意で、ソニドリはもともとアカシヨウピンを指すことばであったということになる³⁴⁾

つまり、カワセミの語源は、この鳥の古名である「ソビ」や「ソニ（鳥）」が音転して「セミ」となり、上に「川」がついて「カワセミ」となったものと思われる。事実、『古事記』には「鷓^{そにどり}鳥の 青^{みけし}き御衣」³⁵⁾とあり、この書物の成立が西暦712年であることから考えると、今から1,300年以上も昔の古代日本ではカワセミは「ソニ（鳥）」と呼ばれていたことが分かる。更に言えば、カワセミの古名である「ソ^に丹」の丹について、松田道生氏は「丹は水銀」として次のように解説している。

カワセミの古名は曾爾、ソニとして表記されています。ソニがなまってセミになったことがわかります。ソニのニは丹、丹は水銀、お化粧に使う^{おしろい}白粉や頬紅の原料にも水銀が使われていたことがあります。カワセミの体の色がカラフルであることが、名前の由来でしょう。なお、ツルのタンチョウも漢字では丹頂の字を当てます。同じ水銀を意味する丹で、この丹は赤色を意味し、タンチョウの頂、すなわち頭が赤いことに由来しています³⁶⁾

以上でカワセミの「セミ」の語源は明らかになったが、変わらないのはカワ

(川)である。つまり日本語の語源から言えば、カワセミは、あくまでも《川の鳥》である。これに対して、ギリシア神話に登場するカワセミ、halcyonは一貫して《海の鳥》である。このことを踏まえた上で、halcyonではなく英名のkingfisherの語源について考えてみよう。

最初に、fisherとある以上、まず何よりも魚を捕らえる鳥である。次に、魚を捕らえて生きるからには、漁業を^{なりわい}生業とする漁師のように、魚を捕るのが上手であるに違いない。事実、解説書にも「英米ではキング・フィッシャーというが……魚捕りの巧みなところから生まれた名である」³⁷⁾とある。ここまでは良い。でも気になるのは、kingの意味である。語順から言えば、kingfisherとは〈king + fisher〉であって、その直訳は「王様漁夫」である。この点について英和辞書を紐解くと、①「〔初 15c ; king + fisher (王の漁夫)〕」(『ジーニアス英和大辞典』)；②「《原義》king's fisher」(『ランダムハウス英語辞典』)、とある。つまりkingfisherは、「王様の漁夫」を意味するking's fisherから来た言葉である。問題は、この「王様の漁夫」を如何に解釈するかである。以下のように、2説ある。

- ① 「英名キングフィッシャーは、頭頂に美しい冠毛があることと、水中に飛びこんで魚を捕らえることによる。」³⁸⁾
- ② 「キングフィッシャー (英名) の名の通り、魚を捕らえることにかけては王様である。」³⁹⁾

①の説はkingfisherを〈王様を思わせる漁夫〉と取る見方であり、その根拠は王冠を連想させる「冠毛」にある。しかし、この説にはどうしても無理がある。というのも、英語はインド・ヨーロッパ語に属する言語であるが、そのヨーロッパに生息するカワセミ科の鳥は^{ただ}只1種、カワセミのみであり、この鳥には冠羽はないからである。ちなみに、ヤマセミには立派な冠羽があるが、この鳥はヨーロッパには生息していない。とすると、②の説が有力ということにな

るが、今少し考えてみたい。

kingfisherの古語は、既に見たように、king's fisherであり、その意味は「王様の漁夫」。換言すれば、kingはfisherに係る形容詞である。そこで英和辞書で「king」の「形容詞」を見てみると、①「1. 重要な、大きな影響力を持つ。2. 大きな、キングサイズの；〈動植物が〉特に大きい。3. きわめて優秀な」(『ジーニアス英和大辞典』)；②「《重要性・大きさなどが》最上[最高、最大]の」(『リーダーズ英和大辞典第2版+プラス』)、とある。ここで問題となるのは、king-の意味を「きわめて優秀な」と取るか、それとも「最上[最高]の」と取るかである。念のために、C. T. Onionの*The Oxford Dictionary of English Etymology*でkingfisherの語源を見てみよう。

earlier † [obsolete] *king's-* (XV) small bird with a long beak brilliant plumage, *Alcedo ispida*. XVI. So G. *königsfischer*, Da. *Kongfisker*. In comb. applied to large or principal features, as *king-bolt* (XIX), *-post* (XVIII)⁴⁰⁾

(筆者注) king-bolt=「【機械】キングボルト《馬車・荷馬車などの前車軸と車体とをつなぐ縦ボルト；前車軸の左右回転の中心軸となる》」(『ジーニアス英和大辞典』)；king-post=「【建^{しんづか}】真東：洋風小屋組みのまん中にある束」(*Microsoft & Shogakukan Bookshelf*)

以上のように複合語の場合、king-の意味は、“large or principal features”，換言すれば「(著しい) 特徴として、サイズが大きいか、または順位・地位・重要性の点で他よりも優れている」である。ちなみに、英英辞書でprincipalの意味を見てみると、*C. O. D.*では「1. First in rank or importance, chief」と、また*Microsoft & Shogakukan Bookshelf*では「1. First, highest, or foremost in importance, rank, worth, or degree; chief」とある。と見てくれば、kingfisherの語源の意味は「魚捕りの(順位では)王様」、つまり「魚を捕ることにかけてはナンバーワンの鳥」となろうか。ちなみに、同種の中では〈最大級〉を意味

する king の付く英語に、king cobra（コブラ科に属する世界最大の毒蛇、体長6メートル）や king salmon（サケの最大種、体長2メートル）がある。

とは言っても、筆者自身は長年、カワセミ一族を〈王様を思わせる鳥〉と思い続けてきたので、個人的には釈然としない思いが残る。というのも、①遠い昔、四国の山里で生まれて初めてヤマセミと遭遇し、その見事な冠羽に鮮烈な印象を受け、以来〈カワセミ一族＝王様を思わせる鳥〉と信じてきた；②その思いで見ると、カワセミの上頭部も宝石を点々と埋め込んだ見事な〈王冠〉に見える；③魚捕りが巧みな点は認めるとしても、長年ウ（鶺鴒）やカイツブリを身近で観察してきた筆者には、〈カワセミ＝漁夫の王様〉とはとても思えなかった、からである。しかし、本論は数学や物理ではなく、文学の論文である。したがって、魚を捕るのに巧みな小さな鳥に見とれて、思わず“king’s fisher!”と叫んだ古人の驚きと感動を筆者もここで改めて共有するのが一番大切なことなのであろう。

5

では問いの③：カワセミは神話、民間伝承、文芸の世界で如何なる役を演じているか。この点について西洋の神話から見てみよう。ギリシア・ローマ神話の世界でカワセミと言えば、先ず一番に思い浮かぶのは「ケユクスとハルキュオネの物語」である。その概要は以下の通りである。

ギリシアのテッサリアに、^{あかつき}暁の明星の息子で、ケユクスという名の王がいた。風の神アイオロスの娘、ハルキュオネを妻とし、相思相愛の二人は誰が見ても幸福そのもののオシドリ夫婦である。しかし、ある時ケユクスの身边で次々と奇怪な出来事が起こり、王はアポロンの神託を伺うべく海を渡る長い旅に出る決心をする。風神の父を通して風の恐ろしさを人一倍知る妻は、必死で夫を思い止まらせようとするが、ケユクスの決意は固い。

「必ず無事で帰る」というケユクスの言葉を信じて、涙ながらに夫を送り出したハルキュオネに出来ることは、夫の無事帰還を日々神々に祈るのみ。一方、ケユクスの船旅は、前半は順風満帆。しかし大洋に差し掛かると、天候は次第に荒れ始め、ついには荒れ狂う暴風雨と大波の中で船は難破して砕け散る。助命を求める神々への祈りも今は虚しく、「もはやこれまで」と死を覚悟したケユクスに出来ることは只一つ：「波が自分の遺体を妻の元に運び、彼女の手で懇ろに弔ってもらえるように」という願いのみ。

この悲劇の後、夢枕に立った夫の姿を通して、その死を知らされたハルキュオネは、最愛の人を最後に見送った海辺へと向かう。そこで目に飛び込んで来たのは、海の彼方の波間に浮かぶ人体らしき漂流物。それは、波に運ばれて次第に近づいてくる。間違いはない、水死体だ。何処の誰とも分からぬが、海難で命を落とした人に違いない。他人事とは思えず、胸を痛めるハルキュオネ。その彼女の元に遺骸は徐々に徐々に近づく。目を凝らして良く見れば、その亡骸は誰であろう。紛う方ない最愛の夫、ケユクスである。

その瞬間、世にも不思議なことに、ハルキュオネは小さな鳥に変身して、高い防波堤の上に飛び移り、そこから物悲しい声で鳴きながら、夫の遺体を目指して海面すれすれに矢のように速く飛んで行く。そして夫の遺骸を翼でかき抱き、嘴で虚しい接吻を繰り返す。それに応えて、これまた不思議なことに、死んだはずのケユクスも妻と同じ鳥になって生き返る。二人は神々の憐れみによってカワセミに変身したのである。この二人は鳥になっても、その愛は変わらず、今も毎年波の上の浮き巣で雛をかえすが、この間、海は荒れず安全に航海できる、と言われている。風の神アイオロスが孫たちのために風を制して、海を静かにしておくからである。

断るまでもなく、この物語は神話であり、科学的な《カワセミ学》ではない。

それは、〈カワセミの繁殖期＝冬至前後〉（正解は春）や、〈営巣場所＝波の上の浮き巣〉（正解は水辺近くの砂地の崖や土手）を見ても明らかである。そもそもヒロインの Halcyon（ケユクスの妻の名）自体が、「カワセミ（kingfisher）と同一視されている伝説上の鳥」（研究社『新英和大辞典 第6版』）なのである。しかし「ケユクスとハルキユオネの物語」は、科学的には滑稽千万ではあっても、民俗学的・文学的には重要である。というのも、この奇譚から「カワセミの日々（halcyon days）」という有名な成語が派生しているからである。「カワセミの日々」を簡潔に言えば、「冬至前後の天候の穏やかな2週間《昔このころに halcyon が卵をかえすと想像された》《1540》」（研究社『新英和大辞典 第6版』）である。これについて『ブルーワー英語故事成語大辞典』、プリニウスの『博物誌』（77年完成）、アリストテレス（Aristotle: 384～322 B.C.）の『動物誌』に以下のような記述がある。

① 『ブルーワー英語故事成語大辞典』

「カワセミの日々」とは、幸福と繁栄の時代のことである。halcyon はカワセミを意味するギリシア語であるが、この語は海を意味する *hals* と、「卵を抱く」を意味する *kuo* とでできている。古代のシシリー人は、カワセミは産んだ卵を2週間海上で抱いてかえすと信じた。冬至前のその時期はいつも波が穏やかなので、そこから上記の意味が出たのである。

And wars have that respect for his repose
As winds for halcyons when they breed at sea.
(Dryden, *Stanzas on Oliver Cromwell* 36)⁴¹⁾

「カワセミが子を生む頃、風の鎮まるが如く
戦は彼の夢を破ることを^{おそ}懼れ
剣戟の音を止める」⁴²⁾

② プリニウス『博物誌』

たいていの場合冬至前後十四日間はカワセミの抱卵に適する穏やかな天候が続く⁴³⁾

③ アリストテレース『動物誌』

カワセミは冬至の頃産卵する。それゆえ、冬至が穏やかな日ならば、冬至の前の七日と後の七日は「カワセミの日々」といわれるのであって、シモーニデースが歌ったとおりである。

ゼウスの神冬の十四日を静め給えば、地上の人々その日々を「なぎの季節」、目もあやなカワセミの子育ての「聖き季節」と呼ぶごと。

たまたまプレイアデス〔すばる〕のある頃に北風が吹き、冬至に南風が吹くと、穏やかな日和になるのである。カワセミは七日間で巣を造り、残りの七日間で卵を産み、雛をかえす、といわれている。ところで、当地では、「カワセミの日々」が必ずしも冬至の頃になるとは限らないが、シケリア〔シチリア島〕の沖では、ほとんどいつもそうなるのである⁴⁴⁾

6

最初に、「カワセミの日々」は、①研究社『新英和大辞典 第6版』；②『リーダーズ英和辞典第2版+プラス』；③小学館『ランダムハウス英語辞典』；④大修館『英和大辞典』；⑤『ブルーワー英語故事成語大辞典』；⑥プリニウスの『博物誌』；⑦アリストテレースの『動物誌』では、全て「2週間」となっている。これに対して、①オウィディウス（Ovid [43B. C. -A. D. 17?]) の『変身物語』；②ブルフィンチ（Thomas Bulfinch [1796-1867]) の『ギリシア・ローマ神話』；③フリースの『イメージ・シンボル事典』では「1週間」⁴⁵⁾とある。果たしてどちらを取るべきか。この点について荒俣宏氏は、平凡社の『世界大百科事典』の中で「カワセミが安全を守る7日または14日のこの期間がくカワセミの日」⁴⁶⁾と述べている。見事な大岡裁きである。

次に立場を変えて、《カワセミ学》の一端について少し触れてみたい。先ず、halcyon と kingfisher (カワセミ) との関連について。前者は「伝説上の鳥」である。とはいえ、「カワセミ (kingfisher) と同一視」される以上、両者の間には何らかの共通点があるに違いない。この点について、オウィディウスの『変身物語』を核に考えてみる。考えられる共通点を列挙してみると、①妻と同様、カワセミに変身するケユクスは明けの明星 (金星) の息子で、「その輝くばかりの美しさ⁴⁷⁾ (“glow of his beauty”)⁴⁸⁾」と形容されている。これは、取りも直さずカワセミの一大特徴である《鳥類の中で最も光り輝く華麗な色彩》を反映している；②「角のような (“horny”)⁴⁹⁾」「細い嘴 (“slender beak”)⁵⁰⁾」とはカワセミの嘴の特徴と一致する；③「海面を掠めて飛ぶ (“she skimmed the surface of the waves”)⁵¹⁾」は、kingfisher の飛び方そのものである；④「飛びながら……鳴く (“As she flew, a plaintive sound ... came harshly from the slender beak”)⁵²⁾」は、「かわせみは飛ぶとき、かん高くチー、チー」という声をたてる⁵³⁾ というカワセミの習性と合致する；⑤この「かん高くチー、チー」という声」に相当する語句は、「いかにも悲しげな、嘆きにみちた鳴き声⁵⁴⁾ (“a plaintive sound, like the lament of someone stricken with grief”)⁵⁵⁾」であるが、そう聞こえるのは筆者だけではあるまい。

では次に、海とカワセミとの関連について。この鳥は本来、内陸部の水辺の鳥である。少なくとも日本と英国ではそうであり、多分 ^{いにしへ}古のギリシアとて例外ではあるまい。それがどうして「ケユクスとハルキュオネの物語」では《海》が舞台なのか。「全くの作り話」と一笑に付してしまえば、それ迄である。しかし、この物語は——奇譚とは言え——「カワセミの日々」という今に伝わる成語を生み出した程の有名な民間伝承である。本当に、この物語の舞台設定には「カワセミと海とが結び付く根拠など有るはずがない」、と言い切れるのであろうか。それが、そうとも言えないのである。というのも、洋の東西を問わず、次のようなれっきとした証拠があるからである：①「冬にはカニやエビなど、小型の甲殻類動物を求めて海岸に迷い込むこともある」(英国版『野と

森の鳥』)；②「(カワセミは) 冬、川の魚が少なくなると海岸の入り江に出てきて、海中の魚をとっていることもある」⁵⁶⁾(『朝日＝ラルース世界動物百科：(鳥類)』)。だとすると、「カワセミの日々」の舞台設定、つまり《季節は冬、場面は海》にピッタリ合致する。

これに類する場面を博物学者の W. H. ハドソン (William Henry Hudson [1841-1922]) は、次のように述べている。彼は英国の南東部の州、イースト・サセックスで秋の季節、海砂利を運ぶ馬車引きの老人と出会い、彼からカワセミの話聞かされる。

He told me that he had seen a kingfisher flying along the coast, startled him as it flashed by, for it was a rare sight at that spot. I had watched one, probably the same bird, two or three days before, fishing from a groin in a rough sea.⁵⁷⁾

(老人は「カワセミが海岸沿いに、水面すれすれに飛んでいるのを見たよ。矢のように飛んでいたが、あのキラキラ輝く青い色には^{びっくら}吃驚した。何しろ、ここでは滅多にお目に掛かれない光景だからね」と言った。実は、この私も1羽見かけていたのだ。2、3日前のことであったが、多分同じ鳥であろう。荒海の中で防波堤から飛び込んで魚を捕っていたのだ。)

この《海とカワセミ》との結び付きについては、『文学の中の鳥 (Birds in Literature)』に以下のような指摘が見られる。

In antiquity the image of the sea and the mourning shorebird somehow became attached to the kingfisher, perhaps because the kingfisher is seldom seen in the company of a mate except in breeding season and never fails to utter his distinctive call as he flies over water. A Greek myth tells the story of Alcyone, a grieving wife who walks along the shore seeking her shipwrecked husband, Ceyx, and leaps into the sea when she sees his body floating there.⁵⁸⁾

(太古の昔、海と嘆きの^{しやうきん}涉禽鳥 [(筆者注)＝海辺の鳥：海岸・河口などに

よく来る鳥；シギ，チドリ類]（『ランダムハウス英語辞典』）というイメージは、どういうわけか、カワセミと結び付くようになった。その理由は、カワセミは繁殖期を除けば、雌雄が一緒に居る姿は滅多に見られないのと、この鳥が水上を飛ぶ時にはいつも、独特の鳴き声を発するからかも知れない。ギリシア神話によると、海で遭難した夫のケユクスを探して、海岸沿いに歩いていた嘆きの妻ハルキュオネは、夫の遺骸を見つけた時、海に身を躍らせた、という。）

ここで《海と嘆きのカワセミ》というイメージが結び付く理由として、著者が挙げるのは次の2点である：①「繁殖期を除けば、雌雄が一緒に居る姿は滅多に見られない」；②「水上を飛ぶ時にはいつも、独特の鳴き声を発する」。なるほど、この着眼点は重要な核心を突いてはいる。だが、「どういうわけか」という言葉が示すように、これだけの説明では未だ釈然としない。せめて「独特の鳴き声」に関する具体的な言及ぐらひは欲しい所である。そこで、この謎解きに挑戦するべく、想像をたくましくして考えてみたい。

遠い太古の昔、人類発祥の地、アフリカから北上してヨーロッパに向かったグループがいる。温暖なアジアと比べるなら、ヨーロッパは寒冷の地である。当然、彼らが最初に住み着いたのは内陸部ではなく、海岸地方であったに違いない。海岸地方とは言え、北国の冬の風景は荒涼としたものである。そこで彼らが遭遇したのは、《海面を掠めて矢のように飛ぶ、名も知らぬ美しい鳥の姿》と、その姿とは裏腹の《悲しげに鳴く「かん高い〈チー、チー〉という声」》。勿論、冬は繁殖期ではない故、目にするカワセミの姿は只の1羽である。想像してみるがいい。蒼い海原をまるで何かを必死に探すように水面を掠めながら矢のように飛翔する孤独な小鳥の姿を！ それを見つめれば見つめるほど、この鳥の鳴き声は古人の心に一層物悲しく響いたに違いあるまい。と考えると、《海と嘆きのカワセミ》というイメージの結び付きは理解できる。この《暗》のイメージがケユクスとハルキュオネの変身前の悲劇物語を生み出

した素地である、とは言えまいか。この話と正に対照を成すのが兩人の変身後の物語、《明》のイメージに覆われた「カワセミの日々」である。では、そのルーツについて探してみたい。

多分、食餌^{しょくじ}の乏しい冬の季節になると、腹を空かせたカワセミの中には、魚を求めて海に出て来るものも居たであろう。W. H. ハドソンの文章で見たように、秋の荒海でさえ姿を現すとしたら、波風の穏やかな「カワセミの日々」は尚更である。この希有の場面に遭遇した古人は、さぞかし鮮烈な印象を受けたに違いない。そして、冬至の前後に不思議と風が止み、海が穏やかになるのを、その頃になると、姿を現すカワセミの霊力によるもの、と信じたのであろう。ここに、目出度い「カワセミの日々」のルーツがある、と思われる。

以上見た《明》と《暗》のイメージを背景に、カワセミの「輝くばかりの美しさ」を体言するケユクスを《父》とし、その外面とは裏腹の「いかにも悲しげな、嘆きにみちた鳴き声」を体現するハルキュオネを《母》として、カワセミ奇譚が生まれた、と推測できる。更に言えば、その舞台がギリシアではないとしても、後にギリシアに進入して来たグループが先住の地から持ち込んだもの、と言える。そう考えると、「ケユクスとハルキュオネの変身物語」の舞台がアジアではなく《ヨーロッパ》であり、しかも、その季節は《冬》という設定も納得がいく。やがて古人の生活圏が広がり、彼らの《カワセミ学》も進歩するにつれて、新たな動物物語が形成されてゆく。それを暗示するのが、『イソップ寓話』にある「カワセミと海」の話である。というのも、ここには《カワセミ学》が多分に混入しているからである。

7

では、そのイソップ寓話を具体的に見てみよう。

The Halcyon and the Sea

The halcyon is a bird who is fond of deserted places and who always lives

on the sea. They say that she makes her nest on the rocky cliffs of the coast in order to protect herself from human hunters. So when a certain halcyon was about to lay her eggs, she went to a promontory and found a rock jutting out towards the sea and decided to make her nest there. But when she went to look for food, it happened that the sea swelled under the blustering wind and reached as high as the halcyon's home and flooded the nest, killing her chicks. When the halcyon returned and saw what had happened, she said, 'What a fool I was to have protected myself against a plot hatched on the land by taking refuge here on the sea, when it is the sea that has utterly betrayed me!'

There are people who do the same thing: while defending themselves against their enemies, they unwittingly fall prey to friends who turn out to be far more dangerous.⁵⁹⁾

「翡翠は、^{ひとけ}人気のない所を好む鳥で、いつも波を枕に暮らしている。人間に捕まるのを警戒して、海辺の断崖に巢を懸けるということだ。

ある時、お産の近い翡翠が岬にやって来て、海に突き出た岩を見つけ、そこで雛を育てることにした。ところが、餌を求めて出かけた間に、突風のため海が波打ち、巢にまで達して、巢床を洗い流し、雛を死なせてしまった。戻って来た翡翠は、事の次第を悟るとこう言った。

「ああ、情なや。^{おか}陸は安心がならぬと、警戒して逃げて来た所が、一層信用のおけぬ場所だったとは」

このように人間の場合でも、敵を警戒する余り、敵よりはるかに^{むご}酷い味方に、うっかりぶつかることもあるのだ。』⁶⁰⁾

このカワセミの物語は、「いつも波を枕に暮らしている」とか「海辺（の断崖）」という神話的な部分、迷信を除けば、「人気のない所を好む鳥」、「人間を恐れる警戒心の強い鳥」、「断崖に巢を懸ける」という部分は真実である。著者は、当時の民間伝承は言うに及ばず、《カワセミ学》をも一応踏まえた上で寓話を構築しているからこそ、その教訓は正鵠を得ているのである。それにしても『イソップ寓話』を読む時、いつも感心するのは、著者が動物の特性を的確

に押さえていることである。まるでプロの手による《似顔絵》を見るようだ。それというのも、人々の《動物学》一般が、神話の時代と比べて格段に進歩してきたからであろう。

8

では舞台を英国に移して、英文学に登場するカワセミについて見てみよう。最初に、シェイクスピア (William Shakespeare [1564-1616]) の作品から。登場場面は次の2カ所：『ヘンリー六世 第一部』（1幕2場）と『リア王』（2幕2場）である。『ヘンリー六世 第一部』から見てみる。ジャンヌ・ダルクは言う。

“Except Saint Martin’s summer, Halcyon days”⁶¹⁾

「マーチン尊者さまの夏日和か、ハルシオン日（平穏節）かが、きつと来ると思ひなさい。」⁶²⁾

この “Halcyon days”（カワセミの日々）については既に見た通りである。では次に、『リア王』を見てみよう。悪党の執事オズワルドについて、ケント伯は言う。

“Renege, affirm, and turn their halcyon beaks

With every gale and vary of their masters”

「主人の気分の風の、向くまま、吹くまま、ノーと言うも、イエスと言うも、かわせみの嘴同様風向き次第。」⁶³⁾

カワセミにまつわる西洋の民間伝承を知らずして、この文意を理解することはできない。というのも、伝説によれば「カワセミは風の向きを教える。天井からカワセミを糸で吊すと、風の吹く方向に嘴を向ける。そのため水夫は船に

カワセミを乗せた⁶⁴⁾ (“it shows the direction of the wind: when hung by a thread from the ceiling, it points its beak in the direction of the wind; sailors used it thus on board ship.”)⁶⁵⁾ からである。どうも西洋の古人は、文字通り《カワセミ＝川の鳥》と見なす我が国とは異なり、《カワセミ＝海の鳥》と捉えていたようである。

では次に、アイザック・ウォルトン (Izaak Walton [1593-1683]) の『釣魚大全 (The Compleat Angler, or the Contemplative Man's Recreation) [1653]』を見てみたい。というのも、〈釣り師と言えは魚〉、〈魚捕りの王様と言えはカワセミ〉、と言えるからである。釣り師から見れば、鳥は魚の敵である。事実『釣魚大全』には、著者自身の意見ではないものの、「彼はやはり (養魚池から) 蛙や川蟬を撲滅することをすすめています⁶⁶⁾ (“he advises to destroy them [frogs] and king-fishers out of your ponds.”⁶⁷⁾)」という物騒な言葉が見られる。ではウォルトン自身、カワセミをどのように見ていたのであろうか。彼は、次のように述べている。

But the poor fish have enemies enough besides such unnatural fishermen; as namely, the Otters that I spake of, the Cormorant, the Bittern, the Osprey, the Sea-gull, the Hern, the King-fisher, the Gorara, the Puet, the Swan, Goose, Duck, and the Craber, which some call the Water-rat: against all which any honest man may make a just quarrel, but I will not; I will leave them to be quarrelled with and killed by others, for I am not of a cruel nature, I love to kill nothing but fish.⁶⁸⁾

「しかしまた、この哀れな魚にはそんな残酷な漁師のほかにもまだまだ敵がたくさんいます。たとえばさっき申しました川獺、それに鶺鴒^う、葦五位^{よし}、鶺鴒^{みさご}、鷗^{かもめ}、青鷺^{あおさぎ}、川蟬^{かわせみ}、ゴララ、鍋鶺鴒^{なべこう}、白鳥^{がちょう}、鶺鴒^{あひる}、家鴨、川鼠などだれでもやっつけたくなるようなものばかりですが、わたしはそうしません。無用な殺生は大きらいなので、ただ魚だけを相手とし、あとは自然界の闘争にまかせます。」⁶⁹⁾

釣り師といえども、さすがは英国紳士。カワセミを魚の敵と認識しながらも、無用な殺生を嫌い「カワセミ撲滅」の忠告には全く耳を貸さず、「あとは自然界の闘争にまかせます」とくる。敬服する他はない。しかし、この偉大な釣り師も《カワセミ学》となると、実に心許ない限りである。というのも、何処の誰が見ても「まるでごみため」でしかないカワセミの巣を、あろうことか、次のように激賞しているからである。

“... no more than a king-fisher’s nest can, which is made of little fishes’ bones, and have such a geometrical interweaving and connection as the like is not to be done by the art of man.”⁷⁰⁾

「川蟬の巣もその精巧なことは驚くばかりで、あれは魚の小骨でできているんですよ。幾何学的に巧妙に組み合わされたその手練は、とても人間技の及ぶものではありません。」⁷¹⁾

9

では英詩に登場するカワセミを見てみよう。ミルトン（John Milton [1608-74]）から。詩人は、「キリスト降誕の朝によせて（‘On the Morning of Christ Nativity’）」（第5節）でカワセミについて言及している。

But peacefull was the night
 Wherin the Prince of light
 His reign of peace upon the earth began:
 The Windes with wonder whist,
 Smoothly the waters kist,
 Whispering new joyes to the milde Ocean,
 Who now hath quite forgot to rave,
 While Birds of Calm sit brooding on the charmed wave.⁷²⁾

「その夜は平和であった

光の王子がこの地上に

平和の御代を始められたその夜は。

風も、静かな驚きにふるえながら

やさしく海に接吻くちづけをよせ

穏やかな大洋に新たなる喜びをささやいていた。

その大洋も今は荒れ狂うことなどすっかり忘れて

平穩の鳥が静まりかえった波の上で卵をかえしているのだ。]⁷³⁾

次に、キーツ (John Keats [1795-1821]) の「エンディミオン (*Endymion*)」
を見てみる。第1巻の453から455行に次の詩句が見られる。

O magic sleep! O comfortable bird,
That broodest o'er the troubled sea of the mind
Till it is hush'd and smooth!⁷⁴⁾

「おお魔法の眠りよ！ おお快い鳥よ、
心の荒れ狂う海をかき抱いて、やがてはそれを
静かにそして穏やかにさせてしまうものよ！」⁷⁵⁾

では第3に、P. B. シェリー (Percy Bysshe Shelley [1797-1822]) の「鎖を解かれたプロメテウス (*Prometheus Unbound*)」を見てみよう。3幕4場にカワセミに言及した箇所がある。

I cannot tell my joy, when o'er a lake,
Upon a drooping bough with nightshade twined,
I saw two azure halcyons clinging downward
And thinning one bright bunch of amber berries,
With quick long beaks, and in the deep there lay
Those lovely forms imaged as in a sky.⁷⁶⁾

「言いようもない歓びは、そのとき湖のかなたへ
 いぬほおずきが絡みしなだれる枝に
 紺碧色こんぺきの翡翠かわせみが二羽、とまり下がっているのを見た、
 ひと房のきららな琥珀色の実をまびいている、
 長い嘴くちばしですばやく、そして、水の深みには
 この鳥たちの愛らしい姿が空にいるように映っていた。』⁷⁷⁾

(若き日の私訳＝この歓びは口では伝えることはできない——
 池の上の、イヌホオズキの蔓からが絡み付いた垂れる枝に、
 蒼色のカワセミが二羽、頭を下に縋すがりつき、長い嘴で機敏に
 色鮮やかな一房の、琥珀色しょうかの漿果ほじくを穿る姿と、
 その愛らしい様みなもが水面の奥深くで、
 まるで空中にいるように映る姿を見た、
 その時の歓びを。)

以上の英詩の中で、先ずミルトンやキーツが取り上げているカワセミは、シェイクスピアと同様、伝説上の鳥 halcyon であり、言及しているのは《明》のイメージ色の「カワセミの日々」である。次に、P. B. シェリーの詩であるが、これは、その評価はともかく《カワセミ学》から言えば、事実と反する。というのも、カワセミの食餌は魚や水生昆虫であり、草木の実など食しはしないからである。「雲雀の歌」を見ても分かるように、どうもこの詩人の想像力は飛躍し過ぎるようである。「輝く翼を持った (詩人)」⁷⁸⁾と評される所以でもあろう。

では詩人が、実際に目にするカワセミ、kingfisher を歌う時、この鳥は詩人の目にどのように映るのであろうか。W. H. デーヴィス (William Henry Davies [1871-1940]) に「カワセミ」という詩がある。

The Kingfisher

It was the Rainbow gave thee birth,
 And left thee all her lovely hues;
 And, as her mother's name was Tears,
 So runs it in thy blood to choose
 For haunts the lonely pools, and keep
 In company with trees that weep.

Go you and, with such glorious hues,
 Live with proud Peacocks in green parks,
 On lawns as smooth as shining glass,
 Let every feather show its mark;
 Get thee on boughs and clap thy wings
 Before the windows of proud kings.

Nay, lovely Bird, thou art not vain;
 Thou hast no proud ambitious mind;
 I also love a quiet place
 That's green, away from all mankind;
 A lonely pool, and let a tree
 Sigh with her bosom over me.

「きみを生んでくれ、わが身につけた美しい色合を

すっかりきみに与えたのは『虹』なのだ。

そして、虹の母親のなまえが『なみだ』であったのだから、

なるほど、血すじは、あらそえぬもの、

きみは、淋しい池をしばしばおとずれ

しおれさがった梢こずえの木々としたしくする。

さあ、きみよ、かくもさんらん燦爛たる色合をみにまとっているんだもの、

緑の遊園地で誇りかな孔雀達と一緒に住みたまえ、

輝く鏡のようになめらかな芝生のういで、
 一枚一枚と、羽をひらき、その模様をみせたまえ。
 心おごれる王様たちのお城の窓の前で、
 小枝にのっかって、羽ばたきしたまえ。
 まったく、そうだ、美しい鳥よ、きみは上べだけ美しいんじゃないのだ。
 きみは、ほこらしい、欲張った心をもたない。
 ぼくもまた、静かな場所が好きだ。
 緑蒼々とした、一切の人間から離れた場所が、
 淋しい池が。そして、一本の木に
 ぼくの頭のういで、その胸の底から、ためいきをつかせよ。]⁷⁹⁾

この詩の中で注目したいのは《カワセミの母は虹、祖母は涙》という詩人の見方である。というのも彼は、カワセミを『虹』と『涙』の鳥、つまり外面と内面が全く対照的な鳥、として捉えているからである。この見方は古の西洋人のカワセミ観と通底する所がある。それというのも、halcyon であれ、kingfisher であれ、この鳥が見た目の華やかさとは裏腹に、その習性や鳴き声に孤独や悲愁を連想させるものを多分に秘めているからであろう。詩人は、カワセミを「淋しい池」を好む習性の鳥と言っている。この《陰》の習性を聞く人の耳に象徴的に訴えかけるもの、それがこの鳥の甲高くて単調な声、オウイディウスの言葉で換言するなら、「いかにも悲しげな、嘆きにみちた鳴き声」とは言えまいか。

誠にカワセミという鳥は、見た目と実体が全く相反する〈二重人格の典型とも言える鳥〉であるが、それを『虹の母』と『涙の祖母』の血を引く鳥と見なす詩人の言葉は、実に言い得て妙である。我が国には「翡翠^{ひすい}のかんざし」という成語がある。でも、これは「女の人の光沢のある美しい黒髪をカワセミの輝くような羽にたとえてこういった」⁸⁰⁾もので、ここにあるのは表面的な『虹』のみである。

10

では最後に、我が国の文芸を見てみよう。最初に、『古事記』から見てみる。というのも、「世界の歌謡の中で、『古事記』の歌謡ほど動物の出現する歌謡はあるまい。特に鳥が多い」⁸¹⁾という指摘があるからである。そう言えば、ざっと見ただけでも、鳩鳥(カワセミ)を初め、雉、鷺、雁、雀、鶺鴒、鶴、千鳥、鷗、白鳥、雲雀、隼、鳩、鶴、鳩鳥、等々と実に多い。『古事記』の上巻「大国主命」の4:「須勢理毘売の嫉妬」の部にある「鳩鳥の青き御衣」については既に触れたが、今少し詳しく見てみよう。下記の引用文は八千矛神、つまり後の大国主命が正妻、須勢理毘売の嫉妬に手を焼き、出雲から大和の地に逃避行するにあたり、彼女に対して贈った歌である。この正妻は、八岐大蛇退治で有名な須佐之男命の娘である。それだけに、ひとたび嫉妬に狂うと、その激しさは尋常ではない。

ぬばたまの 黒き御衣を まつぶさに 取り装ひ 沖つ鳥 胸見る時、は
 たたぎも これは適はず 邊つ波 そに脱ぎ棄て 鳩鳥の 青き御衣を
 まつぶさに 取り装ひ 沖つ鳥 胸見る時 はたたぎも 此も適はず 邊
 つ波 そに脱ぎ棄て 山懸に 蒔きし あたね春き 染木が汁に 染め衣
 を まつぶさに 取り装ひ 沖つ鳥 胸見る時 はたたぎも 此し宜し⁸²⁾

〔現代語訳〕玉のような黒い着物を、丁寧に整えてくれたが、沖つ鳥のように、自分の胸を見て、手を上げ下ろししてみても、どうもこの着物は似合わない。岸の波の寄せる岩に脱ぎ捨てよう。また、翡翠の羽のような青い着物を丁寧に整えてくれたが、沖つ鳥のように自分の胸を見て、手の上げ下ろしをしてみても、この着物も似合わない。岸の波の寄せる岩に脱ぎ捨てよう。今度は、センダイカブラを臼でつき、その汁で染めた着物を丁寧に整えてくれたが、また沖つ鳥のように自分の胸を見て、手の上げ下ろしをしてみると、これならたいへんよろしい。』⁸³⁾

これは歌の背景を考えれば、〈旅衣装の着替え〉という文字通りの意味ではあるまい。というのも、いかに一夫多妻の時代とはいえ、大国主命は諸国の旅に出ては次から次へと妻（側女）を娶り、それに対して正妻の須勢理毘売がひどく焼き餅を焼くからである。何しろ大国主命は数多の女性に「181人の子供」⁸⁴⁾を産ませた程の希代の艶福家でありながら、大の恐妻家ときている。だとすると、旅立つにあたり、嫉妬深い正妻に贈る歌にはそれなりの意味が込められているに違いない。

と見てくれば、歌の裏の意味は「甲の女も駄目、乙の女も駄目、俺にはやっぱりお前が一番だ」と解釈できる。つまり、「ぬばたまの 黒き御衣」と「鷓鴣の 青き御衣」は、いずれも大国主命が正妻の須勢理毘売以外に側女とした女性を暗示するもの、と言える。そこで特に注目したいのは、後者の「鷓鴣 [カワセミ] の 青き御衣」である。というのも、この時点で大国主命の最も新しい側女は沼河比売であり、その前の側女、八上比売は正妻の須勢理毘売にいびられ、既に大国主命とは縁を切っているからである。とすると、残るは只一人、沼河比売のみである。したがって、大国主命が沼河比売と手を切れれば、正妻の須勢理毘売の嫉妬も収まり、夫婦和合のハッピーエンドとなる。

この問題の女性、沼河比売を象徴するもの、それが「鷓鴣の 青き御衣」である。だからこそ、大国主命は、兎にも角にも嫉妬深い正妻を宥めるために、「鷓鴣の 青き御衣」を「脱ぎ捨てる」と言うのである。だとすると、「鷓鴣の 青き御衣」が沼河比売を示す、という証拠が必要となる。それは〈鷓鴣（カワセミ）の生息地＝沼や河〉という点からも窺われるが、他にも証拠がある。というのも、沼河比売は〈翡翠の国〉の出身であり、「ヌナカワ（玉の川）の名が、硬玉ヒスイに由来する」からである。したがって、「鷓鴣の 青き御衣」とは沼河比売を暗示したものとなる。この点について、三浦佑之氏は『古事記を旅する』の中で次のように述べている。

ヌナカワヒメ（沼河比売）の名は、地名に由来する。平安時代の百科事典

『和妙抄』に越後国頸城郡に「沼川」という郷名があり、「奴乃加波」と訓読されている。また『延喜式』には「奴奈川神社」の名があり、ヌナカワヒメは、沼川の地を守る女神だということが確認できる。そして、その名前を分解すると、「ヌ（玉）+ナ（格助詞「～の」）+カハ（川）」で、「玉の川の女神」という意味なのである……このヌナカハ（玉の川）の名が、硬玉ヒスイに由来するというのが明らかになったのは昭和三十年代以降のことである。縄文時代からヒスイが呪力をもつ装飾品として使われていることは知られていたが、日本列島でヒスイが産出するとは考えられていなかった。ところが、昭和十四（1939）年、姫川の支流の小滝川上流にヒスイ原石の産地があることを、東北大学の鉱物学者が学会誌に発表したのである……その後……この地域が世界最古のヒスイ加工の中心地であったことが判明する」⁸⁵⁾

では、これ以外の箇所でカワセミの登場する場面を今一つ見てみよう。下記の引用文は、『古事記』上巻「葦原中平定」の2：「天若日子」から。舞台は天若日子の葬送の場面である。

其處そこに喪屋もやを作りて、河鴈かわがりを岐佐理持きさりもちとし、鷲さぎを掃持はきもちとし、鳩鳥そにとりを御食人みけびととし、雀うすめを確女きじしとし、雉なきおんなを哭女なきおんなとし、かく行なひ定めて、日八夜ひやか八夜やよを遊びき⁸⁶⁾

〔現代語訳〕そこを殯屋もがりとして、河の鴈かりを死者に食事をささげる役のものとし、鷲さぎを殯屋の掃除をするものとし、翡翠かわせみを食事をつくるものとし、雀すずめを米をつく女とし、雉きじを泣き女として、八日八晩の間、連日、にぎやかに遊んで、死者の霊を迎えようとした。〕⁸⁷⁾

この文は、見ての通り「鳥が死者の魂のとぶらいに欠かせない存在である」⁸⁸⁾ことを示すものである。それというのも、古人は「鳥は天空を自由に飛翔する

ことから、祖霊や神の居住する世界へ容易に移動できると考え、神の使いとみたり、靈魂を運ぶとして崇拜した」⁸⁹⁾からである。しかし、ここで注目したいのは鳥の役目である。誰しも容易に理解できるのは、米を食う「雀を雌女」、ケンケンと大きな声で鳴く「雉を哭女」とする役だけである。

残りの3鳥とその役目については、以下私見を述べる。最初に、河鴈かわかりとは「がんかも科の大形の水鳥……晩秋、北方から渡来し、翌春再び北方に去る」⁹⁰⁾渡り鳥である。〈河鴈＝「死者に食事をささげる役のもの」〉の理由は、この鳥が水辺で群生するのと、渡りをする際には、かぎ型の隊列を組んで、天空を飛翔してゆく勇壮な姿に由来する。この鮮烈な印象を与える飛翔について「この鳥は飛ぶ時は整然としていて、かぎになつたり、竿になつたり見事である」⁹¹⁾と激賞する言葉もある。ちなみに、北大寮歌の「都ぞ弥生」に、この鳥に言及した有名な詩句：「豊ゆたかに稔みのれる石狩かりがねの野に 雁かりがねはるばる沈しみみてゆけば 羊群ようぐん声なく牧舎ぼくしゃに帰り 手稲ていねの巔いただきたそがれ 黄昏きぎこめぬ」⁹²⁾がある。次に、〈鷺＝「殯屋の掃除をするもの」〉の理由は、この鳥特有の飛び方、つまりまるで箒を思わせるように、水面の上を「ゆっくりとはばたいて飛ぶ」⁹³⁾にある。最後に、〈翡翠＝「食事をつくるもの」〉の理由は、この鳥の英名、kingfisherがヒントとなる。つまり、カワセミは魚を捕るのが実に巧みなので、食事を作る役を仰せ付かった、と言えるのではなかろうか。これで『古事記』は終えたい。

11

次に、宮沢賢治の短編童話：『やまなし』を見てみよう。「やまなし」とはバラ科の落葉高木のことであるが、物語の設定は〈時＝5月；所＝明るい日の光が差し込んでいる谷川；主な登場動物＝谷川の底で対話している2匹の幼い兄弟蟹と、それに水面（谷川の天井）の近くを泳ぎ回っている1匹の魚〉である。そこに突如としてカワセミが闖入する。

その時です。にわか俄に天井に白い泡がたって、青びかりのまるでぎらぎらす

てっぼうだま
る鉄砲弾のようなものが、いきなり飛込んで来ました。

にい
兄さんの蟹ははつきりとその青いもののさきがコンパスのように黒く
とが
尖っているのを見ました。と思ううちに、魚の白い腹がぎらっと光って一
ぺんひるがえり、上の方へのぼったようでしたが、それっきりもう青いも
のも魚のかたちも見えず光の黄金の網はゆらゆらゆれ、泡はつぶつぶ流れ
ました。

ひき
二疋はまるで声も出ず居すくまってしまいました。

お父さんの蟹が出て来ました。

『どうしたい。ぶるぶるふるえているじゃないか。』

『お父さん、いまおかしなものが来たよ。』

『どんなもんだ。』

『青くてね、光るんだよ。はじがこんなに黒く尖ってるの。それが来たら
お魚が上へのぼって行ったよ。』

『そいつの眼が赤かったかい。』

『わからない。』

『ふうん。しかし、そいつは鳥だよ。かわせみと云うんだ。大丈夫だ、安
心しろ。おれたちにはかまわないんだから。』

『お父さん、お魚はどこへ行ったの。』

『魚かい。魚はこわい所へ行った。』

『こわいよ、お父さん。』⁹⁴⁾

ここではカワセミは、《ギラギラと青光りして、その先が黒く尖っている鉄砲玉のようなもの》、つまり得体の知れない異形の怪物として捉えられ、詩人に『虹』と謳われた羽の色ですらも悍ましい恐怖の対象でしかない。それというのも、著者の視座が谷川の上ではなく、一番低い所に位置する川底にあり、しかも弱者である子蟹の目を通して、「水面を見上げる視点」⁹⁵⁾で世界を眺めているからであろう。この最底辺に身を置いて弱者の視点から世界を見るな

ら、スズメのような小さな鳥のカワセミですらも、その全てが恐怖の対象に一変する、と著者は言う。

『やまなし』の童話は、農芸科学者としての冷徹な目と熱烈な法華信者としての慈悲の心が結晶した宮沢賢治の名作と言えようが、それにしても衝撃的なカワセミ観ではある。しかし、この衝撃にこそ作者の意図した狙いがあるのは自明である。というのも、子供に限らず、カワセミを知るものにとって、この衝撃が大きければ大きい程、鮮烈な印象を通して《多層的にモノを見る目の大切さ》に気付かせてくれるからである。

12

以上洋書と和書を通してカワセミの姿を見てきたが、本論で見た洋の東西に関する限り、そのカワセミの姿は、まるでコインの表と裏のように相異なるものである。それは、この鳥に対する両者のイメージ・シンボルを比べてみれば自ずと明らかである。

西洋でカワセミと言えば、「一般に平穩・平和・幸福の前兆（を表す）」は定説であるが、この見方が大局を正しく捉えていることは本論で見た通りである。具体的に言えば、①シェイクスピア、ミルトン、キーツの文で見たように、カワセミは世に言う「カワセミの日々」の大立役者、つまり、人間にとって荒海の風波を静めてくれる有り難い霊鳥；②『イソップ寓話』では、警戒し過ぎて失敗する鳥である。でも、これは我ら人間を恐れる余りのこと。したがって、ここは少し寛容な見方をして、人間に教訓を与えてくれる鳥、と捉えたい；③『釣魚大全』では、釣り師の目を欺いて「(その巣作りは) 敵ながら天晴れ」と言わせる始末；④P. B. シェリーの詩では、詩人に「口では表現できない喜び」を与える鳥；⑤W. H. デーヴィスの詩では、孤愁の詩人を慰める姿の美しい鳥、と大本は《明》のイメージで満ちている。

ひるがえって、我が国の文人たちではどうであろうか。本論で見た国文学のカワセミ像を集約して、日本版の『イメージ・シンボル事典』を編纂すれば、

その内容は次のようになる。①「夫婦不仲の原因となる側女を意味する」(『古事記』:「^{そにとり}鳩鳥の ^{みけし}青き御衣」参照)；②「死者を送る葬送の席に欠かせない鳥」(『古事記』:「^{そにとり}翠鳥を ^{みけびと}御食人とし」参照)；③「突如として平和な世界を破壊する異形の殺戮者」(宮沢賢治『やまなし』参照)となり、西洋版の事典の内容とは正に対照的になる。つまり、この3点には《暗》のイメージ⁹⁶⁾が通底している。

このように英国と我が国では、そのカワセミ像に明らかな違いが見られるが、その違いは、カワセミを halcyon のイメージを通して見るか、見ないか、に起因するのではあるまいか。勿論 halcyon とは伝説上の鳥である。しかし、この幻の吉鳥を、英国を含めた西洋では、太古の昔からカワセミと信じてきた長い伝統を有する。それ故、英国の文人たちのカワセミ像は、総じて眩い^{まぼゆ}《明》のイメージで貫かれているようである。それを大別すれば次の2つ：①カワセミを halcyon と同一視して、^{ずい}瑞鳥(目出度い鳥)と賛美する；②この有り難い吉鳥のイメージが文人たちの潜在意識に今も色濃く残存しているせい、カワセミ(kingfisher)の好感度は一貫して非常に高く、この鳥を積極的に《明》のイメージで見ようとする⁹⁷⁾となろうか。と見てくれば、彼らのカワセミ像が押し並べて肯定的で好意的な《光》に満ちてはいても、何処かしら足が地に着かない夢・幻的な所があるのも宜なるかなである。

これに対して、我が国の文人たちの描くカワセミ像は、総じて現実的・写生的である。それは、前出の俳句を見れば一目瞭然である。草木の実を食するカワセミの姿を歌う詩人など、我が国では考えられないことである。というのも、古来日本人は、カワセミをく現実^{まま}に有るが儘^まの鳥として見てきたからである。『古事記』が「青き」にかかる枕詞に「カワセミ」を選び、またこの鳥を「葬送の席に欠かせない」「食事を作るもの」と定めているのは、カワセミが見た通りの kingfisher、つまりく翠色で、魚を捕るのが巧みな鳥だからである。断るまでもなく、人間が古代から鳥を靈的存在として特別視してきたのは、鳥がく天の世界くに通じる「天空を自由に飛翔する」ことが出来るからで

あり、これは古来洋の東西に共通する普遍的見方である。その意味からも、『古事記』の鳥類観は押し並べて現実を踏み外してはいない、と言えよう。

この現実^にに立脚し、視座と視点を変えてカワセミを見る時、その行き着く先は『やまなし』で見た恐ろしい異形のカワセミ像となるのは必定かも知れない。西洋と比べるまでもなく、「これでは余りにも酷^{ひど}すぎる。この闇のカワセミ像に一縷^るの救いはないのか」と言えば、ないわけではない。というのも、カワセミの姿を氷山^{たと}に喩え、それを水底から見上げてみると、「ケクスとハルキュオネの悲劇」という巨大な『涙』の氷塊が目に入るからである。それを知るなら、『やまなし』を読んだ子供たちのカワセミに対する見方も変わるに違いない。自己の『涙』を未だ知らない人の目を恐れるかのごとく、今日もカワセミは「一切の人間から離れた場所」で、「孤独」に水面を見つめている。W. H. デーヴィスの言う『涙』を広義に解して、これに嫉妬の涙、葬送の涙、魚の涙、それにカワセミ自体の涙をも含めるなら、誠にカワセミとは『虹』と『涙』の鳥である、と言えよう。

註

- * 松山大学は松山城の直ぐ近くにあり、この文京地区は実に野鳥の多い所である。教室や研究室にもメジロの高音が響いて来るのは、この山の鳥が周辺で営巣していることの証左である。こんなに野鳥が多いのは緑の樹木が多いからであろう。これについては内田清之助氏の『鳥の歳時記』、「松山城と鳥」（創元社、1957、p. 74）に次のような解説がある：「松山城は慶長七年（1602年）加藤嘉明の築城に始まるが、当時の城山は全くのはげ山で、城の偉容にもかかわるほどであった。しかるに寛永十二年（1635年）松平定行があらたに封ぜられて入城するに及んで、この木のない城山をなんとかして立派な森林にしたいと念願し、その手段として全山にアワヤキビその他の雑穀の種子をまいた。その目的は山野の小鳥をそれによって誘致し、集まった鳥の排せつ物にまじって出る樹実の自生により自然の造林をはかるという計画だった。それが見事に成功し、松山城の城山は今日見るような美しい樹木が繁茂するようになったということである……たしかに、ここの森林はその景観の美がほこるにたるばかりでなく、また樹種の豊富な点においても、注目すべきものがある」。本論はこの「楽園」のような環境に久方ぶりの《喜びと驚き》の衝撃を受けて書き上げたものである。

- 1) 復元一郎『俳句の鳥・虫図鑑：季語になる折々の鳥と虫 204 種』（成美堂出版, 2005）, pp. 4-5 参照。
- 2) 松田道生『大江戸花鳥風月名所めぐり』（平凡社新書, 2003）, p. 55.
- 3) 『朝日＝ラルース世界動物百科：（鳥類）』第 87 号（朝日新聞社, 1972）, p. 2.
- 4) 樋口広芳『鳥たちの生態学』（朝日新聞社, 1987）, p. 155 参照。
- 5) Chandler S. Robbins, Bertel Bruun, and Herbert S. Zim, *A Guide to Field Identification; Birds of North America* (Golden Press, 1966), p. 178.
- 6) Cf. 小林桂助『標準原色図鑑全集 5：鳥』（保育社, 1974）, p. 37：「ヨーロッパではカワセミただ 1 種である」。
- 7) Chandler S. Robbins, Bertel Bruun, and Herbert S. Zim, *A Guide to Field Identification; Birds of North America*, p. 178.
- 8) 『朝日＝ラルース世界動物百科：（鳥類）』第 87 号, p. 3.
- 9) 荒俣宏『世界大博物図鑑 第 4 巻：[鳥類]』（平凡社, 1987）, p. 260.
- 10) 安部直哉「ブッポウソウ」, 『世界大百科事典』（日立デジタル平凡社, CD-ROM 版, 1998）。以下『世界大百科事典』からの引用は全てこの版による。
- 11) 高野伸二『自然観察と生態シリーズ 7：日本の野鳥』（小学館, 1976）, p. 47.
- 12) 英名については, 山階芳麿『世界鳥類和名辞典』（大学書林, 1986）, pp. 284-288 参照。
- 13) 樋口広芳『鳥たちの生態学』, p. 155；高野伸二『自然観察と生態シリーズ 7：日本の野鳥』, p. 48 参照。
- 14) 安部直哉「カワセミ」, 『世界大百科事典』
- 15) David Alderton, *The Complete Books of Birds* (Hermes House, 2002), p. 163.
- 16) 『朝日＝ラルース世界動物百科：（鳥類）』第 87 号, p. 13.
- 17) 同上, pp. 3-7.
- 18) *Birds of Field and Forest*, illustrated by E. Demartini and introduced by O. Štěpánek (Spring Books, 1965), p. 38.
- 19) 日本鳥類保護連盟監修『野鳥歳時記 1：春の鳥』（小学館, 1984）, p. 84.
- 20) 復元一郎『俳句の鳥・虫図鑑：季語になる折々の鳥と虫 204 種』, p. 79.
- 21) 柳田国男『野草雑記・野鳥雑記』（角川文庫, 1978）, p. 183.
- 22) 稲畑汀子編『大きな活字のホトトギス新歳時記』（三省堂, 1991）, p. 351.
- 23) 川崎展宏・金子兜太『鳥獣虫魚歳時記（春・夏の巻）』（朝日新聞社, 2000）, p. 134.
- 24) 復元一郎『俳句の鳥・虫図鑑：季語になる折々の鳥と虫 204 種』, p. 79.
- 25) 同上
- 26) 同上
- 27) 「かわせみ」, 『広辞苑（第 5 版）』と内田亨『動物百話』（ニューサイエンス社, 1971）, p. 58 参照。
- 28) 内田亨『動物百話』, p. 58.

- 29) アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』山下主一郎主幹, 荒このみ・上坪正徳・川口絃明・喜多尾道冬・栗山啓一・竹中昌宏・深沢俊・福士久夫・山下主一郎・湯原剛共訳 (大修館書店, 1984), p. 377.
- 30) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* (North-Holland Publishing Company, 1984), p. 285.
- 31) 内田亨『動物百話』, p. 58.
- 32) 樋口広芳『鳥たちの生態学』, p. 161.
- 33) 志村英雄・山形則男・柚木修『野鳥ガイドブック: パードウォッチングのための市街地・野山・水辺の鳥 186 種』(永岡書店, 1999), p. 60.
- 34) 吉田金彦編著『語源辞典: 動物編』(東京堂出版, 2001), pp. 78-79.
- 35) 倉野憲司校注『古事記』(岩波文庫, 2000), p. 50.
- 36) 松田道生『大江戸花鳥風月名所めぐり』, pp. 56-57.
- 37) 小林清之助『鳥の歳時記』(パール新書, 1967), p. 83.
- 38) 荒俣宏『世界大博物図鑑 第4巻: [鳥類]』, p. 253.
- 39) 日本野鳥の会監修『鳥の歳時記3: 夏の鳥』(学習研究社, 1983), p. 144.
- 40) C. T. Onions, *The Oxford Dictionary of English Etymology* (Oxford University Press, 1966), p. 506.
- 41) E. C ブルーワー『ブルーワー英語故事成語大辞典』加島祥造主幹, 鮎沢乗光編集, 鮎沢乗光・伊藤泰雄・岡田岑雄・小澤喬・内藤純郎・並木愼一・水脇準・宮本三恵子・吉田尚子共訳 (大修館書店, 1989), p. 802.
- 42) 中川芳太郎『英文学風物詩』(研究社, 1957), p. 695.
- 43) 『プリニウスの博物誌 第Ⅱ巻』中野定雄・中野里美・中野美代訳 (雄山閣, 2001), p. 800.
- 44) アリストテレス『動物誌 (上)』鳥崎三郎訳, 岩波文庫, 1998, p. 211.
- 45) Cf. ①*The Metamorphoses of Ovid Translated and with an Introduction by Mary M. Innes* (Penguin Books, 1981), p. 265; ②*Bulfinch's Mythology by Thomas Bulfinch* (Modern Library, 1855), p. 65; ③Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, p. 285.
- 46) 荒俣宏「カワセミ」, 『世界大百科事典』
- 47) トマス・ブルフィンチ『ギリシア・ローマ神話』大久保博訳 (角川文庫, 1977), p. 136.
- 48) *Bulfinch's Mythology by Thomas Bulfinch*, p. 60.
- 49) 同上, p. 64.
- 50) *The Metamorphoses of Ovid*, p. 265.
- 51) 同上
- 52) 同上
- 53) 『朝日=ラールス世界動物百科: (鳥類)』第87号, p. 6.
- 54) オウイディウス『変身物語 (下)』中村善也訳 (岩波文庫, 1981), p. 148.

- 55) *The Metamorphoses of Ovid*, p. 265.
- 56) 『朝日＝ラルース世界動物百科：(鳥類)』第 87 号, p. 3.
- 57) W. H. Hudson, *Nature in Downland* (J. M. Dent & Sons, 1951), p. 16.
- 58) Leonard Lutwack, *Birds in Literature* (University of Florida, 1994), p. 74.
- 59) “The halcyon and the sea” in *Aesop’s Fables*. A new translation by Laura Gibbs (Oxford University Press [World’s Classics], 2002) from *Aesopica: Aesop’s Fables in English, Latin & Greek* の電子テキストによる。
- 60) 『イソップ寓話集』中務哲郎訳 (岩波文庫, 1999), pp. 40-41.
- 61) 『シェイクスピア大全 CD-ROM 版』(新潮社, 2003)。以下シェイクスピアの原文及び日本語訳の引用文は全てこの版による。
- 62) 坪内逍遙訳
- 63) 大山俊一訳
- 64) アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』, p. 377.
- 65) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, p. 285.
- 66) アイザック・ウォルトン『完訳釣魚大全』森秀人訳 (虎見書房, 1970), p. 328.
- 67) Izaak Walton, *The Compleat Angler* (Everyman’s Library, 1964), p. 200.
- 68) 同上, pp. 49-50.
- 69) アイザック・ウォルトン『完訳釣魚大全』森秀人訳, pp. 92-93.
- 70) Izaak Walton, *The Compleat Angler*, p. 188.
- 71) アイザック・ウォルトン『完訳釣魚大全』森秀人訳, p. 308.
- 72) *Poetical Works by John Milton* (Project Gutenberg, 1999) の電子テキストによる。
- 73) トマス・ブルフィンチ『ギリシア・ローマ神話』大久保博訳, pp. 146-147.
- 74) *The poetical works of John Keats* (Ward, Lock & Co., limited), p. 17.
- 75) トマス・ブルフィンチ『ギリシア・ローマ神話』大久保博訳, p. 147.
- 76) *The Complete Works of P. S. Shelley* (Project Gutenberg, 2003) の電子テキストによる。
- 77) シェリー『鎖を解かれたプロメテウス』石川重俊訳 (岩波文庫, 2003), p. 198.
- 78) 松浦暢「P. B. シェリー」, 『世界大百科事典』
- 79) 尾島庄太郎『英詩の味わい方』(研究社, 1971), pp. 79-81.
- 80) 国松俊英『鳥のことわざウォッチング』(河出文庫, 1999), p. 109.
- 81) 梅原猛『古事記』(学研 M 文庫, 2001), p. 264.
- 82) 倉野憲司校注『古事記』(岩波文庫, 2000), p. 50.
- 83) 梅原猛『古事記』, pp. 48-49.
- 84) 木屋隆安『古事記おもしろ読本』(泰流社, 1996), p. 79.
- 85) 三浦佑之『古事記を旅する』(文芸春秋社, 2007), pp. 96-97.
- 86) 倉野憲司校注『古事記』, p. 59.
- 87) 梅原猛『古事記』, p. 59.

- 88) 萩原秀三郎『稲と鳥と太陽の道』(大修館書店, 1996), p. 14.
 89) 同上
 90) 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫『岩波国語辞典 第三版』(岩波書店, 1983), p. 216.
 91) 故事ことわざ研究会編『動物の格言諺事典』(アロー出版社, 1976), p. 50.
 92) 堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』(岩波文庫, 2000), p. 182.
 93) 森岡弘之「サギ」, 『世界大百科事典』
 94) 宮沢賢治「やまなし」, 『セロ弾きのゴーシュ』(角川文庫, 2007), pp. 26-27.
 95) 同上, 別役実「解説: いのちを感じとる」, p. 304.
 96) ただし, ①と②の《暗》は③のものとは異質である。というのも, この2つは「(『古事記』の) 魅力の最大のものは, 日本神話だけが持っている〈明るさ〉ではないかと思う」(高橋鐵『日本の神話』[光文社, 1966, p. 203])という指摘にあるように, 「明るさ」に繋がる《暗》だからである。簡潔に見てみよう。最初に, ①の点から。大国主命の歌を聞いて, さすがの須勢理毘売も心を改め, 酒杯を手に取り, 夫に寄り添って歌う。そのさわりの部分を現代語訳で言うと以下の如し。

「あなたは男ですもの, めぐり歩く鳥や, 磯の岬ごとに, どこにでも若い妻をお持ちになれることでしょう。けれど, 私は女ですから, あなたをさしおいて異性はありません。夫はありません。どうかお出かけにならないで。寝屋の絹蒲団の中で, 私とおやすみになってくださいませ。さあ, この酒を召しあがって。」(高橋鐵『日本の神話』, p. 155)

『古事記』の伝えるところによると, この後すぐ夫婦は杯を交わし, 「互いに首に手を掛け合い, 現在まで, 夫婦の神は鎮座なさっている」(梅原猛『古事記』, p. 50)とのことである。誠に「メダシ, メダシ」のハッピーエンドで, 《笑い》がある。これだけではなく, 前述の〈旅衣装の着替え〉の箇所にも《笑い》がある。希代の艶福家でありながら大の恐妻家の夫と気性の激しさでは天下一品の嫉妬深い妻とくれば, 取り澄ました弁明だけでは収まるはずがないのは自明である。「スセリ姫に別れを告げる歌で, 自分の旅衣装をためつすがめつしては着替えるところでは, コミックなしぐさも加わっていたことでしょう」(加藤知彦『古事記入門』<文献出版, 1975>, pp. 82-83)という指摘は, その証左である。

- 97) 付言すれば, 「カワセミの日々」の中で人々が受けるイメージは, 圧倒的に, 《闇》ではなく《光》であろう。この明るい《光》のイメージの中では「ケユクスとハルキユオネの変身」という悲劇の物語ですらも主役を引き立てる脇役, 換言すれば《甘み》を強めるための《塩》でしかない。それは「桃源郷」という東洋の伝説一つ取ってみても明らかである。我々として人生の旅路の中で「桃源郷」を連想させる楽園的な「山中他界」に遭遇することは皆無とは言えまい。もしそのような希有の体験をした時, 一体誰が, 「桃源郷」を見付けながら再訪できなかった武陵の漁師や, この仙境の探求に生涯を捧げながら, 夢叶

わず、失意の内に病死した南陽の君主，劉子驥^{りゅうしき}の悲しみを思い，面前の喜びの世界を《闇》のイメージで見るとはどうか。